

Effect of Experiential Activities in Boy Scout on youth

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 優 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6144

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響

Effect of Experiential Activities in Boy Scout on youth

田中 優 *

Masashi TANAKA

<キーワード>

ボーイスカウト, 体験活動, 生きる力, リーダーシップ, 自尊感情

<要 約>

本研究は、学校教育であるフォーマル教育、家庭教育であるインフォーマル教育、そして、地域における組織化された教育であるノンフォーマル教育の3つの教育の内、ノンフォーマル教育としてのボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響を明らかにすることを目的としている。本調査における体験活動は「2014年度新多磨地区BS山中訓練キャンプ」であり、2泊3日のボーイスカウトの訓練キャンプに参加した13歳から15歳のスカウト19名(男子18名,女子1名)を調査対象として、キャンプの参加前(事前調査:2015年2月15日)と参加後(事後調査:2015年3月29日)に質問紙調査を実施した。調査内容は、Ⅰ「生きる力」:「IKR 評定用紙(簡易版)」、Ⅱリーダーシップ測定尺度、Ⅲ自尊感情尺度、Ⅳフェイスシートであった。「生きる力」、および、自尊感情について事前と事後の得点の有意な差はほとんど認められなかったが、リーダーシップ能力の「集団維持機能」については有意な差が認められた。2泊3日の体験活動が、リーダーシップや社会的スキルを向上させたという結果は、ノンフォーマル教育としてのボーイスカウト教育の可能性を示すものであり、更なる実証的な調査研究が望まれる。

1. 問題

(1) 体験活動と3つの教育の連携

中央教育審議会（2013）は「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」において、「体験活動は人づくりの“原点”であるとの認識の下、未来の社会を担う全ての青少年に、人間的な成長に不可欠な体験を経験させるためには、教育活動の一環として、体験活動の機会を意図的・計画的に創出することが求められている。」と体験活動の意義と重要性について述べている。また、「地域・学校・家庭・民間団体・民間企業等がそれぞれの立場で自らの役割を適切に果たし、連携していくことが必要である。」と教育の連携について言及している。

教育の連携については、フォーマル教育（定型的教育）、インフォーマル教育（無定型的教育）、そして、ノンフォーマル教育（非定型的教育）の3つの教育の連携が重要である（図1）。フォーマル教育とは、年代別に等級づけされた小学校から大学に至る教育制度である。インフォーマル教育とは、自らの生活環境の中で、日々の経験や教育的影響、人的物的資源から姿勢、価値観、技能、知識を身につけるための生涯に及ぶプロセスのことであり、一般的には、家庭における教育を指している。そして、ノンフォーマル教育とは、公式

の確立された制度以外の組織化された教育活動のことであり、教育目的をもった組織された機関で、特定の受益者に向けられるものである。

(2) スカウト教育法について

ノンフォーマル教育について、国際的な5大ノンフォーマル教育組織は、「世界YMCA同盟」「世界YWCA」「世界スカウト機構」「ガールガイド・ガールスカウト世界連盟」「国際赤十字赤新月社連盟」とされる。この中でも、世界スカウト機構は、日本においては、ボーイスカウトが、歴史と実績のある教育組織として知られている。

ボーイスカウト運動は、1907年イギリスで発祥した青少年教育運動である。日本には、1911（明治44）年に紹介され、後藤新平を初代総長として1922（大正11）年、少年団日本連盟が設立され、1924（大正13）年に世界事務局に登録された。加盟員数は、1983（昭和58）年の33万人をピークに、その後減少傾向が続き、現在は122,812人（2015（平成27）年3月31日付）である。

ボーイスカウト教育が他の青少年団体と異なるところは、単に、野外活動や奉仕活動などを行なうことが目的ではなく、そのプログラムに、「ちかい・おきて」の実践、班制教育、進歩制度、野外活動を取り入れているところにある。

ボーイスカウト運動には、以下の3つの特徴が

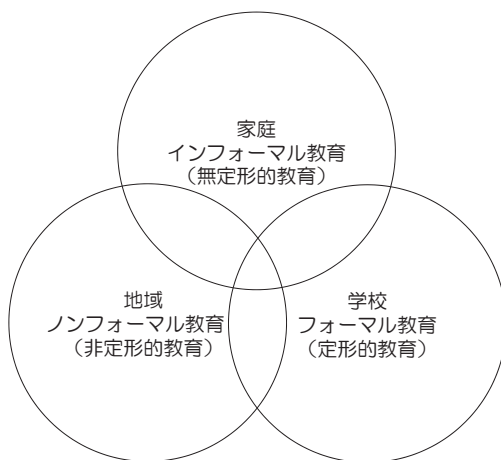


図1 フォーマル教育・ノンフォーマル教育・インフォーマル教育の連携

上げられる。

- 1 青少年の自発活動であること。
- 2 青少年が、「誠実、勇気、自信、および国際愛と人道主義を把握すること」、「健康を築くこと」、「人生に役立つ技能を体得すること」、「社会に奉仕できること」のすなわち、「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」を4本柱としていること。
- 3 幼児期から青年期にわたる各年齢層に適用するよう、年齢に応じた部門があり、それぞれのプログラムが一貫していること。

スカウト教育の教育目的は、「自らが進んで働きかける、積極的・能動的な社会性の涵養」とされる。そして、その教育目的を達成するため「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」の4つの領域に関して、その資質を高めることを意図した活

動が行われている。さらに、その活動は、スカウトにとっては、楽しいゲームという形を基本としている。すなわち、スカウト達は、スカウティングという楽しいゲームに熱中する間に、ひとりでは、「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」の社会人に必要な4つの資質を高めていくのである(図2)。

(3) 目的

体験活動の重要性が指摘され、その実践のために、多様な教育の場での体験活動が望まれている。体験活動の実践について、ノンフォーマル教育における長い歴史と大きな実績、および、今後への可能性を有するボーイスカウト教育ではあるが、現状では、加盟員の減少という問題を抱えている。同様の問題に対して、公益社団法人ガールスカウト日本連盟では、さまざまな取り組みを行ってお

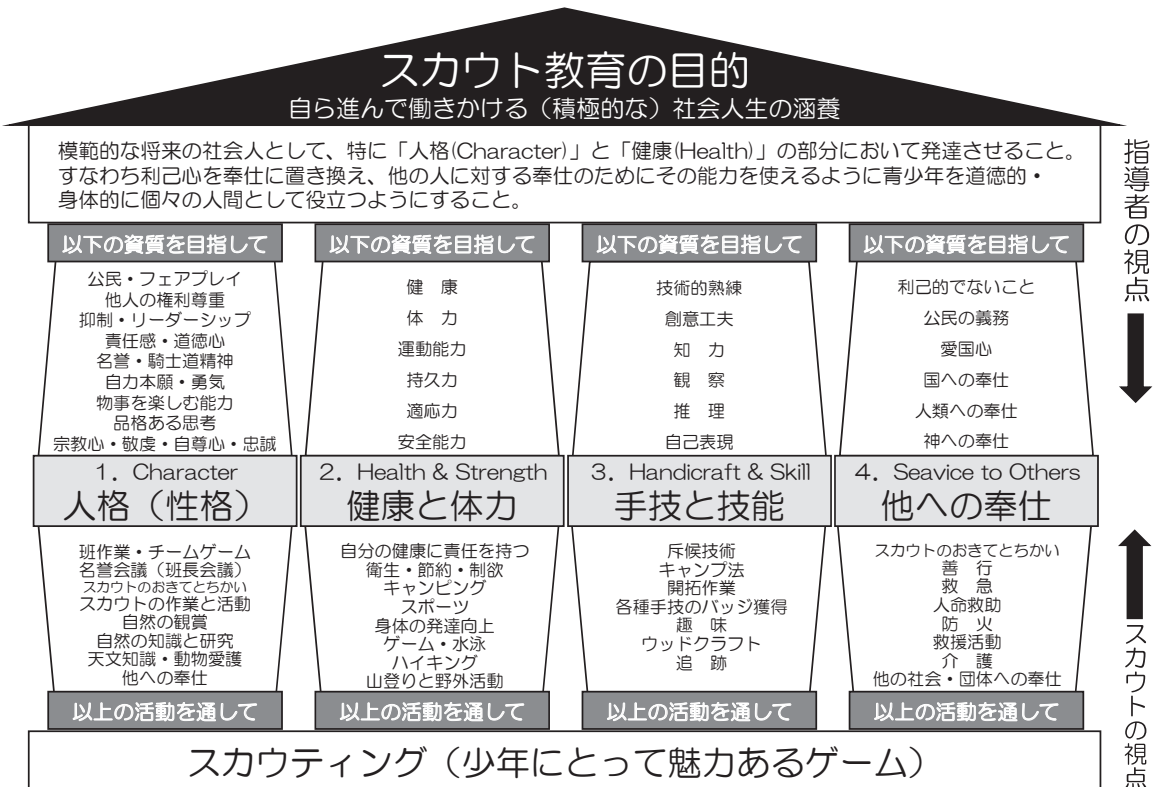


図2 スカウト教育の四本柱：スカウトと指導者の視点

り、その中で、ガールスカウト教育に関する調査研究を行い、ガールスカウト教育は、①積極的に人と関わる力、②仲間と成し遂げる力、③挑戦しようとする力、④自己肯定感、⑤ジェンダーに偏らない世界観を高めること。また、それを実現するためには、「体験重視」「グループ活動」「異年齢とのかかわり」「女性だけの環境」が重要であることを実証的に明らかにしている（公益社団法人 ガールスカウト日本連盟, 2013）。

ボーイスカウト教育における教育効果の調査研究は、2011年開催の第22回世界スカウトジャンボリー（22WSJ）や2013年開催の第16回日本ジャンボリー（16NJ）において、長期野営が青少年に与える影響に関する実証的な調査研究が行われている。すなわち、第22回世界スカウトジャンボリーでは、ジャンボリーへの参加により「生きる力」や「国際理解能力」が向上し、身体的、精神的等の分野における成長がみられ、参加者は「効果的な経験ができた」という満足度が高いことを（中島・島貫, 2012）、また、第16回日本ジャンボリーでは、ジャンボリーへの参加が異文化理解を深め、グローバルな人材育成の契機になり、パトロールシステム（班制度）の機能によりリーダーシップ能力が向上したことなどを実証的に明らかにし、第22回世界スカウトジャンボリーと第16回日本ジャンボリーの調査結果には、多くの類似が見られたと報告している（中野・齋藤, 2014）。中野と齋藤は、これらの調査研究が、ボーイスカウト活動の成果を、実証的、客観的に評価することにより、曖昧な身体感覚を一定の基準によって数値化し、多くの人がその感覚を共有することができ、青少年へのジャンボリーの教育的意義とその必要性を再認識する機会であることを指摘している。そして、今後は、事前事後の調査だけでなく、3か月後や1年後の調査の必要性、および、更なる調査研究体制の確立、そして、普段のボーイスカウト活動を含めた教育的意義やその必要性を定量的に把握できる仕組みづくりが必要であると今後の課題を述べている。

そこで、本研究では、より普段のボーイスカウト活動について、より日常的な、学校、地域、家

庭という教育環境に焦点をあて、ノンフォーマル教育としてのボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 体験活動

本研究における体験活動は、日本ボーイスカウト東京連盟新多磨地区主催の「2014年度新多磨地区BS山中訓練キャンプ」で、新多磨地区内の13のボーイスカウト隊から選抜されたスカウトによる2泊3日の野営技能向上、班運営や班長・次長としての意識向上のための訓練キャンプである。

スカウトは、訓練キャンプ（2015年3月27日～29日）の前に実施された2回の事前集会（第1回事前集会：2015年2月15日、第2回事前集会：2015年3月15日）において、4つの混成班に分けられ、班ごとに、班名、班の役務などをそれぞれ決めた。訓練キャンプ（表1）では、班活動を基本として、テント泊にて生活を行い、班対抗（一部個人対抗）で、野外技能や野営技能を競うゲーム（表2）を行なった。訓練キャンプの日程、プログラムは、班員どうしの交流、リーダーシップ能力、野外技能や野営技能、スカウティングに対する意識などの向上を趣旨として、参加指導者により、企画、実施された。

(2) 調査対象

調査対象者は、日本ボーイスカウト東京連盟新多磨地区が主催する「2014年度新多磨地区BS山中訓練キャンプ」に参加したスカウト19名（男子：18名、女子：1名）であった。

(3) 調査方法

調査方法は、2泊3日の訓練キャンプ（2015年3月27日～29日）の参加前（事前調査）と参加後（事後調査）に質問紙調査を実施した。調査では、回答前に、事前調査と事後調査を実施すること、事前事後の調査を比較する必要性を説明し、両調査におけるデータの対応を確保するために、所属・

表1 訓練キャンプ・日程表

time	1日目(3月27日)	2日目(3月28日)	3日目(3月29日)
5:30	/	起床	起床
6:00		配給	配給
7:00		朝食・サイト整備	朝食・サイト整備
8:00		点検	点検
9:00		朝礼・モーニングゲーム	朝礼・モーニングゲーム
10:00	集合・開会式 オリエンテーション	プログラム 「火熾し」	徹営
11:00	設営		
12:00	昼食	昼食	昼食
13:00			
14:00	設営	プログラム 「ロープ結び」	閉会式
15:00			/
16:00	食料配給	料理コンテスト	
17:00	国旗降納	国旗降納	
18:00	夕食	夕食	
19:00	ナイトプログラム 「計測」	営火	
20:00			
21:00	班長会議 班会議	班長会議 班会議	
22:00	消灯	消灯	

表2 訓練キャンプにおける野営技能ゲーム

日程	野外技能ゲーム	内容
1日目:夜	計測ゲーム	20m先に置かれたランタンの間隔や、地面に置かれた3つのランタンまでの距離を計測する。
2日目:午前	火熾しゲーム	火床の上に張られた麻紐を、火を熾して切る早さを競う。
2日目:午後	ロープ結びゲーム	丸太をロープ1本で運ぶなど、各種のロープ結びの技能を競う。
2日目:午後	料理コンテスト	山形県の郷土料理「ほうとう」を手打ちで作り出来栄を競う。
2日目:夜	営火(キャンプファイヤー)	班ごとにオリジナルのスタンプを考え披露する。

自隊での役務・氏名・年齢・性別への回答を求めた。

(4) 調査期日

調査期日については、事前調査は、2015年2月15日 第1回事前集会開始時に、事後調査は、2015年3月29日 訓練キャンプ閉会式直後に行った。

(5) 調査内容

1) 「生きる力」: 「IKR 評定用紙(簡易版)」(独立行政法人国立青少年教育振興機構, 2010)

「生きる力」を測定するために独立行政法人国立青少年教育振興機構が作成した28項目(表3)。「いやなことは、いやとはっきり言える」といった心理的社会的能力(14項目)、「自分かってな、わがままを言わない」といった徳育的能力(8項目)、「早寝早起きである」といった身体的能力(6項目)の3つの能力で「生きる力」を測定する。各項目に対して、1:まったくあてはまらない、2:あてはまらない、3:あまりあてはまらない、4:少しあてはまる、5:よくあてはまる、6:とてもよくあてはまる、の6件法で回答を求めた。

表3 「生きる力」：「IKR 評定用紙（簡易版）」（独立行政法人国立青少年教育振興機構，2010）

上位能力	下位能力	調査項目
心理的 社会的 能力	非依存	いやなことは、いやとはっきり言える
		小さな失敗はおそれない
	積極性	自分からすすんで何でもやる
		前むきに、物事を考えられる
	明朗性	だれにでも話しかけることができる
		失敗しても、立ち直るのがはやい
	交友・協調	多くの人に好かれている
		だれとでも仲よくできる
現実肯定	自分のことが大好きである	
	だれにでも、あいさつができる	
視野・判断	先を見通して、自分で計画が立てられる	
	自分で問題点や課題を見つけることができる	
適応行動	人の話をきちんと聞くことができる	
	その場にふさわしい行動ができる	
徳育的 能力	自己規制	自分かってな、わがままを言わない
		お金やモノのむだ使いをしない
	自然への関心	花や風景などの美しいものに、感動できる
		季節の変化を感じる事ができる
まじめ勤勉	いやがらずに、よく働く	
	自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	
思いやり	人のために何かをしてあげるのが好きだ	
	人の心の痛みがわかる	
身体的 能力	日常的行動力	早寝早起きである
		からだを動かしても、疲れにくい
	身体的耐性	暑さや寒さに、負けない
		とても痛いケガをしても、がまんできる
野外技能・生活	ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	
	洗濯機がなくても、手で洗濯できる	

2) 少年期(高学年)のリーダーシップ測定尺度(国立妙高青少年自然の家, 2011)

国立妙高青少年自然の家(2011)が開発した、青少年の学童期(小学校高学年)に求められるリーダーシップ能力を測定する尺度。三隅(1978)の「PM理論」を基に、「課題達成(Performance)機能」、すなわち、集団全体で何らかの目標を定めて、その目標に向かって成員を動機づけ、目標を達成させる機能を測定する12項目、また、「集団維持(Maintenance)機能」、すなわち、集団のメンバー同士のコミュニケーションを円滑にさせ、人間関係を良好にし、結束させる機能を測定する8項目の計20項目からなる。20項目は、「課題達成機能」と「集団維持機能」の2つの上位指標の下に、5つの中位指標として、青少年のリーダー性を特定する要素(資質・能力)、すなわち、「困難に自ら立ち向かおうとする力」「計画的に考え行動する力」「情報を収集し、創造力をもって課題を解決しようとする力」「役割を意識し、集団の規範を守る力」、そして、「集団内の人間関係を円滑にし

ようとする力」の「リーダーシップ5つの力」に分けられ、さらに、5つの中位指標をそれぞれ2つに分けた10の下位指標、すなわち、「意欲・自立性」「危機意識」「計画・判断」「省察・アクション」「情報収集」「想像力」「役割意識」「規範意識」「伝達・コミュニケーション」そして、「ユーモア・明るさ」から構成される(表4)。各項目に対して、1:まったくあてはまらない、2:あてはまらない、3:あまりあてはまらない、4:少しあてはまる、5:よくあてはまる、6:とてもよくあてはまる、の6件法で回答を求めた。

3) 自尊感情尺度(福岡県青少年アンビシャス運動推進室, 2010)

福岡県青少年アンビシャス運動推進室(2010)が、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度の項目を児童にもわかりやすく翻訳したもので、肯定的な5つの設問と否定的な5つの設問からなる(表5)。各項目に対して、1:まったくあてはまらない、2:あてはまらない、3:あまりあてはまらない、4:

表4 少年期（高学年）のリーダーシップ測定尺度（国立妙高青少年自然の家，2011）

	上位指標	中位指標	下位指標	項目	
少年期（高学年）のリーダーシップ測定尺度	課題達成機能	困難に自ら立ち向かおうとする力	1	意欲・自立性	(1) 人が嫌がることでも自分から進んで取り組むことができる。 (2) すずんでお手伝いや勉強をすることができる。
			2	危機意識	(3) 危ないことを予測して避けることができる。 (4) その場の状況にあわせて考えることができる。
		計画的に考え行動する力	3	計画・判断	(5) 決めた時間にあわせて行動することができる。 (6) 先のことを考えて行動することができる。
			4	省察・アクション	(7) 内容を考えて話すことができる。 (8) 反省したことを次の行動や活動に生かしている。
		情報を収集し、創造力をもって課題を解決しようとする力	5	情報収集	(9) 物事をいろいろな方向から見ることができる。 (10) わからないことは自分で調べることができる。
			6	想像力	(11) うまくいくようにいろいろな工夫をすることができる。 (12) 興味のあることにチャレンジしてみたい。
	集団維持機能	役割を意識し、集団の規範を守る力	7	役割意識	(13) 自分がすべき役割をはっきりわかっている。 (14) 全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる。
			8	規範意識	(15) ルールや約束を必ず守ることができる。 (16) 親や先生に言われなくても規則にしたがうことができる。
		集団内の人間関係を円滑にしようとする力	9	伝達・コミュニケーション	(17) 困っている友だちがいたら励ますことができる。 (18) 友だちの立場に立って話を聞くことができる。
			10	ユーモア・明るさ	(19) 明るく元気にあいさつや返事ができる。 (20) 場を和ますことができる。

表5 自尊感情尺度（福岡県青少年アンビシャス運動推進室，2010）

1	すべての点で自分に満足している。	P
2	ときどき「自分はためだなあ」と思うことがある。	N
3	いくつかの点で見どころがあると思っている。	P
4	友だちがやるのと同じくらいにいろいろなことができる。	P
5	あまり得意なことがない。	N
6	ときどき「役に立っていないなあ」と感じることがある。	N
7	少なくとも自分がほかの人と同じくらい価値ある人だと思う。	P
8	もっと自分を尊敬できたらいいなと思う。	N
9	何をやっても失敗するのではないかと感じてしまう。	N
10	自分のことを積極的に認めている。	P

注：Pは肯定的項目、Nは否定的項目（逆転項目）

少しあてはまる，5：よくあてはまる，6：とてもよくあてはまる，の6件法での評定を求めた。

なお，1)「生きる力」：「IKR 評定用紙（簡易版）」，2) 少年期（高学年）のリーダーシップ測定尺度，および，3) 自尊感情尺度は，事前調査と事後調査の両調査において共通して用いた。

4) フェイスシート

事前調査では，①スカウト経験（年数）②スカウトを始めた部門③スカウト活動の楽しさ④自信・興味のあるスカウト技能⑤現在の級⑥進級の希望⑦所属・自隊での役務・氏名・年齢・性別⑧調査の感想・質問への回答を求めた。

事後調査では，①楽しかったプログラム②自信・興味が出たスカウト技能③訓練キャンプの楽しさ④来年後輩に参加を勧める程度⑤進級の希望⑥所属・自隊での役務・氏名・年齢・性別⑦調査の感想・質問への回答を求めた。

3. 結果

(1) 回収率，および，調査対象者について

回収率は，事前事後共に100%であった。また，調査対象者の平均年齢は，事前調査時13.9歳（SD=0.5歳），事後調査時14.0歳（SD=0.4歳）であった。性別は，男子18人（95%），女子1名（5%）であった。

(2) 調査対象者のスカウト経験，スカウト活動に対する楽しさについて

調査対象者のスカウト経験は，5年が2人（11%），7年が4人（21%），8年が9人（47%），9年が3人（16%），10年が1人（5%）であった。スカウト活動を始めた部門は，ビーバースカウト（幼稚園年長から小学2年）からが16人（84%），カブスカウトからが3人（16%）であった。自隊での役務は，班長が9名（47%），次長が4名（21%），その他が6名（32%）であった。

(3) スカウト活動に対する楽しさについて

ボーイスカウト活動に対する楽しさについては、ぜんぜん楽しくないが1人(5%)、まあ楽しいが4人(21%)、楽しいが8人(42%)、とても楽しいが6人(32%)であり、9割以上(94.7%)がスカウト活動は楽しいと感じていた(図3)。

(4) 訓練キャンプの感想：楽しさ、参加の意義について

訓練キャンプに参加して楽しかったかどうか

については、まあ楽しかったが3人(15.8%)、楽しかったが7人(36.8%)、とても楽しかったが9人(47.4%)と、すべてのスカウトが楽しかったという感想を持ち、その約半数(47.4%)がとても楽しかったと感じていた(図4)。

また、訓練キャンプへの参加の意義について、「後輩に来年の訓練キャンプへの参加をすすめますか?」と尋ねたところ、まあすすめるが1人(5.3%)、すすめるが11人(57.9%)、絶対すすめるが7人(36.8%)と、すべてのスカウトが参加

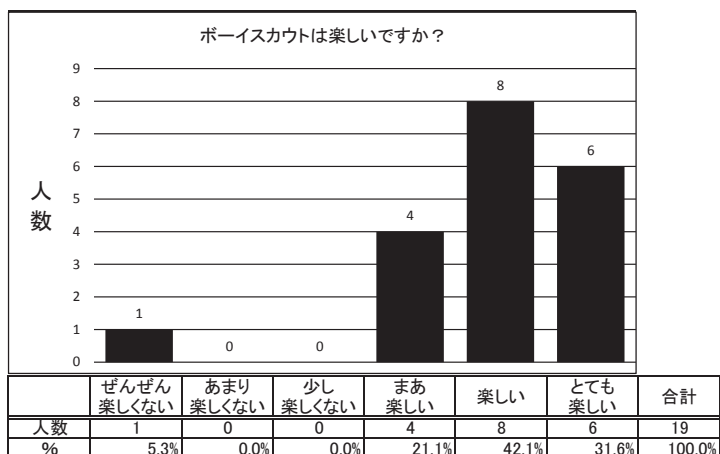


図3 スカウト活動に対する楽しさ

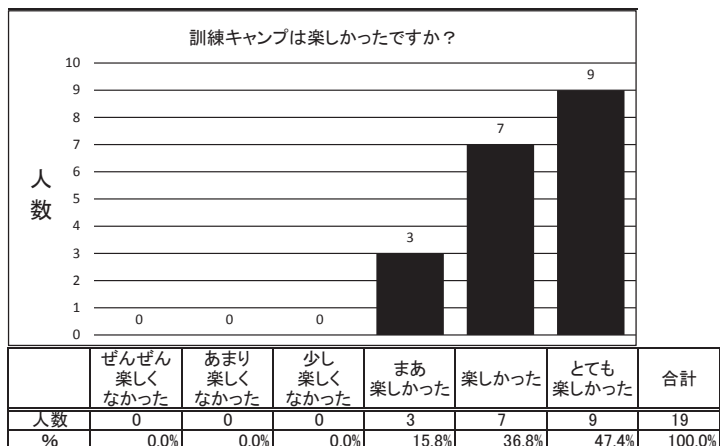


図4 訓練キャンプの感想：楽しさ

の意義を強く感じていた（図5）。

(5) 訓練キャンプ参加前後の「スカウト技能への興味・自信」の変化について

訓練キャンプ参加の前後で、興味や自信が高まったスカウト技能は、計測（事前：0人→事後：3人）、ロープ（事前：4人→事後：8人）、火熾し（事前：10人→事後：11人）、野営法（テント）（事前：6人→事後：7人）であった（図6）。

(6) 訓練キャンプ参加前後の「進級目標」の変化について

訓練キャンプ参加の前後で、進級目標が高まったかどうかについて、調査前のスカウトは、初級が2人、2級が8人、1級が9人であった。これらのスカウトが、何級まで進級したいかという進級目標の高まりは、訓練キャンプ参加の前後で、1級までが5人から3人へ、菊章までが両調査ともに6人、ベンチャー章までが4人から5人へ、

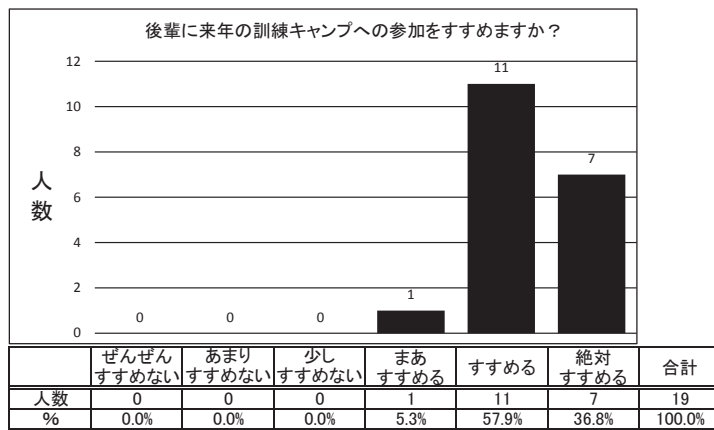


図5 訓練キャンプの感想：参加意義

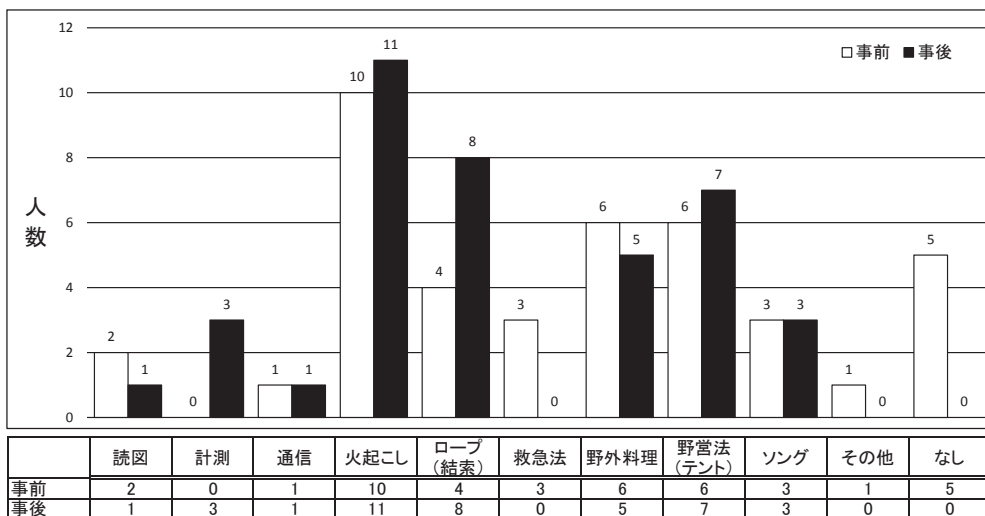


図6 訓練キャンプ参加前後のスカウト技能への興味・自信の変化

富士章までが4人から5人へと、訓練キャンプの参加前より参加後は、より上のランクへの進級を目標とするようになった(図7)。

(7) 訓練キャンプ参加前後の「生きる力」の変化

「IKR 評定用紙」の「生きる力」、および、上位能力の「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」、また、下位能力のいずれについても、訓練キャンプ参加前と参加後で得点の有意な差は認められなかった。しかし、項目レベルでは、「心理的社会的能力」の下位能力「明朗性」の「失敗しても、立ち直るのがはやい」の項目において、参加前(3.7(SD=1.3))より参加後(4.1(SD=1.5))の得点が有意に高く($t(17)=2.72, p<.05$)、能力が有意に向上していると判断された。また、「心理的社会的能力」の下位能力「交友・協調」の「多くの人に好かれている」の項目において、参加前(3.6(SD=1.2))より参加後(3.2(SD=1.2))の得点が有意に低く($t(18)=2.14, p<.05$)、能力が低下していると判断された(表6)。

(8) 訓練キャンプ参加前後の「リーダーシップ能力」の変化

「リーダーシップ能力」については訓練キャン

プ参加前と参加後の得点に有意な差は認められなかった($t(15)=1.12, n.s.$)。また、リーダーシップのPM理論(三隅,1978)のP機能、すなわち、上位指標の「課題達成機能」については訓練キャンプ参加前と参加後の得点に有意な差は認められなかった($t(18)=0.99, n.s.$)。同様に、「課題達成機能」の中位指標および下位指標のいずれについても訓練キャンプの参加前後での得点の有意な差は認められなかった。一方、M機能、すなわち、上位指標の「集団維持機能」については参加前(32.1(SD=5.5))より参加後(34.1(SD=6.0))の得点が有意に高く($t(18)=2.80, p<.01$)、集団維持機能のリーダーシップ能力が有意に向上していると判断された。さらに、「集団維持機能」の中位指標の「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」は参加前(15.8(SD=3.4))より参加後(17.2(SD=3.6))の得点が有意に高く($t(18)=2.96, p<.01$)、その下位指標である「ユーモア・明るさ」は参加前(7.7(SD=1.7))より参加後(8.8(SD=2.0))の得点が有意に高く($t(18)=4.60, p<.001$)、さらに、「ユーモア・明るさ」についての項目レベルでは「場を和ませることができる」は参加前(3.4(SD=1.2))より参加後(4.2(SD=1.2))の得点が有意に高かった($t(18)=3.34, p<.001$) (表7)。

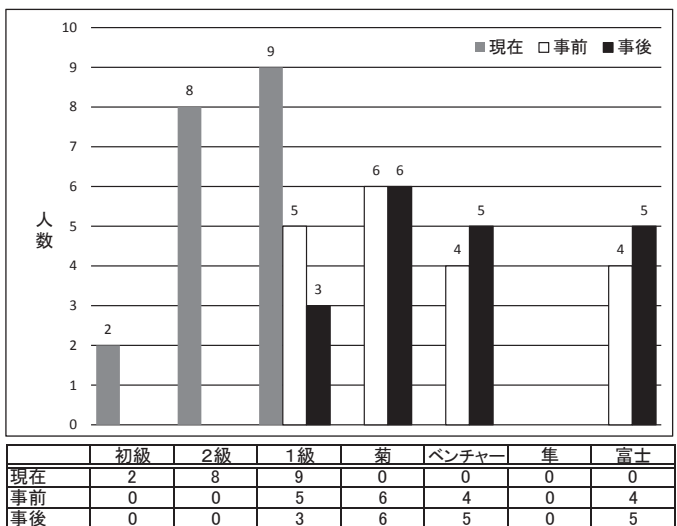


図7 訓練キャンプ参加前後の進級目標の変化

表6 「生きる力」の変化（事前調査 vs 事後調査） t 検定結果

	事前調査		事後調査		t値	df	p	
	平均	SD	平均	SD				
生きる力	115.6	17.6	114.8	15.4	0.15	12	.88	
心理的社会的能力	56.1	10.7	56.9	9.1	0.33	13	.75	
非依存		8.4	2.2	8.4	1.8	0.00	16	1.00
	いやなことは、いやとはっきり言える	4.1	1.4	4.5	1.0	0.96	16	.35
	小さな失敗はおそれない	4.2	1.3	3.8	1.3	1.59	18	.13
積極性		7.7	1.9	8.1	1.6	0.92	17	.37
	自分からすすんで何でもやる	3.8	1.2	4.1	1.1	0.85	17	.41
	前むきに、物事を考えられる	3.8	1.0	4.1	0.8	1.07	18	.30
明朗性		7.6	2.5	8.0	2.7	1.37	17	.19
	だれにでも話しかけることができる	3.8	1.4	4.0	1.6	0.57	18	.58
	失敗しても、立ち直るのがはやい	3.7	1.3	4.1	1.5	2.72	17	.02
交友・協調		7.7	2.1	7.5	1.8	0.50	18	.63
	多くの人に好かれている	3.6	1.2	3.2	1.2	2.14	18	.05
	だれとでも仲よくできる	4.1	1.3	4.3	0.9	0.87	18	.40
現実肯定		8.2	2.3	8.1	1.9	0.31	18	.76
	自分のことが大好きである	3.4	1.5	3.3	1.4	0.52	18	.61
	だれにでも、あいさつができる	4.8	1.1	4.8	0.9	0.00	18	1.00
視野・判断		7.2	2.2	7.6	1.9	0.79	17	.44
	先を見通して、自分で計画が立てられる	3.3	1.0	3.7	1.0	1.33	17	.20
	自分で問題点や課題を見つけることができる	3.9	1.3	4.0	1.1	0.16	18	.88
適応行動		7.7	1.5	8.0	1.4	0.84	18	.41
	人の話しをきちんと聞くことができる	3.9	1.0	4.2	1.1	1.05	18	.31
	その場にふさわしい行動ができる	3.8	0.9	3.8	0.8	0.21	18	.83
徳育的能力	33.4	5.0	33.3	4.4	0.08	17	.94	
自己規制		7.3	2.4	7.5	1.8	0.40	18	.69
	自分かってな、わがままを言わない	3.9	2.0	4.0	1.2	0.25	18	.80
	お金やモノのむだ使いをしない	3.4	1.4	3.6	1.5	0.36	18	.72
自然への関心		8.6	1.1	8.8	2.0	0.58	17	.57
	花や風景などの美しいものに、感動できる	3.9	1.0	3.9	1.3	0.00	18	1.00
	季節の変化を感じることができる	4.6	0.9	4.9	1.2	1.68	17	.11
まじめ勤勉		8.5	1.8	8.3	1.2	0.53	18	.60
	いやがらずに、よく働く	4.0	1.3	4.0	0.8	0.00	18	1.00
	自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.5	1.1	4.3	0.7	0.89	18	.38
思いやり		8.6	1.6	8.7	1.6	0.35	18	.73
	人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.3	0.9	4.4	1.0	0.29	18	.77
	人の心の痛みがわかる	4.3	0.9	4.4	1.1	0.25	18	.80
身体的能力	21.8	6.0	23.8	3.5	1.34	17	.20	
日常的行動力		6.6	2.3	7.2	1.6	1.84	18	.08
	早寝早起きである	3.3	1.6	3.8	1.1	1.93	18	.69
	からだを動かしても、疲れにくい	3.3	1.2	3.4	1.2	0.29	18	.77
身体的耐性		7.2	2.0	8.2	1.8	1.30	17	.21
	暑さや寒さに、負けない	3.7	1.1	4.1	1.3	1.04	18	.32
	とても痛いケガをしても、がまんできる	3.6	1.4	4.1	0.9	1.34	17	.20
野外技能・生活		7.8	2.4	8.2	1.8	0.70	18	.49
	ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	3.9	1.4	4.1	1.1	0.62	18	.54
	洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.9	1.3	4.1	1.0	0.62	18	.54

(9) 訓練キャンプ参加前後の「自尊感情」の変化
「自尊感情尺度」については参加前 29.6 (SD=8.7) と参加後 31.1 (SD=7.3) で有意な得点の差は認められなかった ($t(18)=0.90, n.s.$)。

4. 考察

(1) 調査対象者の特徴

本調査の調査対象者は、平均年齢 14 歳で、性別はほとんどが男子 (95% : 18 名 / 19 名)、小

表7 リーダーシップ能力の変化（事前調査 vs 事後調査） t 検定結果

	事前調査		事後調査		t値	df	p
	平均	SD	平均	SD			
リーダーシップ	82.1	12.6	84.4	11.8	1.12	15	.28
課題達成 (Performance)機能	47.8	8.7	46.3	9.2	0.99	18	.34
困難に自ら立ち向かおうとする力	15.7	3.8	14.9	3.5	1.20	18	.24
意欲・自立性	7.6	2.1	6.7	2.0	2.07	18	.05
人が嫌がることでも自分から進んで取り組むことができる。	3.8	1.1	3.4	1.0	1.59	18	.13
すすんでお手伝いや勉強をすることができる。	3.8	1.2	3.3	1.2	1.82	18	.86
危機意識	8.1	2.0	8.2	2.0	0.29	18	.77
危ないことを予測して避けることができる。	3.9	1.0	4.1	1.3	0.83	18	.42
その場の状況にあわせて考えることができる。	4.2	1.0	4.1	0.9	0.21	18	.83
計画的に考え行動する力	14.9	3.2	15.1	3.6	0.16	18	.88
計画・判断	7.4	1.5	7.3	1.9	0.25	18	.81
決めた時間にあわせて行動することができる。	3.9	0.9	3.7	1.0	0.85	18	.41
先のことを考えて行動することができる。	3.5	1.1	3.6	1.1	0.37	18	.72
省察・アクション	7.5	1.8	7.7	2.0	0.56	18	.59
内容を考えて話すことができる。	3.8	1.0	3.8	1.0	0.00	18	1.00
反省したことを次の行動や活動に生かしている。	3.7	0.9	3.9	1.2	0.85	18	.41
情報を収集し、創造力をもって課題を解決しようとする力	17.3	3.0	17.2	2.7	0.17	15	.87
情報収集	8.1	2.3	8.2	1.6	0.27	16	.79
物事をいろいろな方向から見ることができる。	3.8	1.1	3.9	0.9	0.20	18	.85
わからないことは自分で調べることができる。	4.3	1.4	4.3	1.2	0.00	18	1.00
想像力	9.2	1.2	8.7	1.7	1.58	17	.13
うまくいくようにいろいろな工夫をすることができる。	4.1	0.8	4.2	0.9	0.33	18	.75
興味のあることにチャレンジしてみたい。	5.1	0.7	4.7	1.0	1.72	17	.10
集団維持機能 (Maintenance)機能	32.1	5.5	34.1	6.0	2.80	18	.01
役割を意識し、集団の規範を守る力	16.3	3.5	16.9	2.9	1.10	18	.29
役割意識	7.9	2.1	8.4	1.7	1.19	18	.25
自分がすべき役割をはっきりわかっている。	4.1	1.4	4.3	0.9	0.89	18	.39
全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる。	3.9	1.0	4.1	1.0	1.07	18	.30
規範意識	8.4	1.8	8.5	1.7	0.53	18	.60
ルールや約束を必ず守ることができる。	4.3	1.0	4.4	0.8	0.57	18	.58
親や先生に言われなくても規則にしたがうことができる。	4.1	1.0	4.2	1.0	0.25	18	.80
集団内の人間関係を円滑にしようとする力	15.8	3.4	17.2	3.6	2.96	18	.01
伝達・コミュニケーション	8.1	1.9	8.4	1.9	0.88	18	.39
困っている友だちがいたら励ますことができる。	4.3	1.2	4.5	1.3	0.85	18	.41
友だちの立場に立って話を聞くことができる。	3.8	1.1	3.9	0.8	0.44	18	.67
ユーモア・明るさ	7.7	1.7	8.8	2.0	4.60	18	.00
明るく元気にあいさつや返事ができる。	4.3	1.0	4.6	1.1	1.10	18	.29
場を和ますことができる。	3.4	1.2	4.2	1.2	3.34	18	.00

学校以後のスカウト経験（ビーバースカウト：84%、カブスカウト：16%）を有するグリーンバースカウトが約7割（班長9名（47%）と次長4名（21%））であり、調査対象者の9割以上（94.7%）がスカウト活動は楽しいと感じていた。すなわち、本調査結果は、小さい時から楽しくスカウト活動を行ってきた男子の班長・次長クラスのグリーンバースカウトに関するものである。

注：制服につける班長章と次長章には、班長は2本、次長は1本の緑色横線（グリーンバー）があることから、班長と次長をグリーンバーと呼んでいる。

（2）訓練キャンプ参加後の感想・参加意義、「スカウト技能への興味・自信」、「進級目標」の変化
訓練キャンプに参加したすべてのスカウトが、訓練キャンプは楽しく、そのうち約半数（47.4%）はとても楽しかったと感じており、9割以上（94.7%）が「後輩にも参加をすすめる」と参加の意義を感じていた。また、訓練キャンプに参加して、計測やロープのスカウト技能への興味や自信が高まり、より上のランクへの進級を目指すようになった。

(3) 訓練キャンプの「生きる力」「リーダーシップ」「自尊感情」への効果

事前調査と事後調査の各尺度得点の差の検定結果から、生きる力、その上位能力の心理的社会的な能力、徳育的能力、身体的能力、および、その下位能力のいずれにおいても、また、自尊感情においても、訓練キャンプの参加による有意な効果は認められなかった。しかし、リーダーシップの上位指標である集団維持機能、および、その中位指標の「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」、その下位指標の「ユーモア・明るさ」に関するリーダーシップ能力については、訓練キャンプの参加による有意な効果が認められた。今回の訓練キャンプは、新多磨地区内の13のボーイスカウト隊から選抜されたスカウトによる2泊3日の野営技能向上、班運営や班長・次長としての意識向上のための訓練キャンプであり、普段別々の隊で活動しているスカウトによる混成班で、さらに、スカウトの7割がグリーンパー（班長・次長）であったことから、班長として、あるいは、次長として、どのように班をまとめていくのかという共通の課題を持ち、共に活動することから、互いがよきモデルとなり、相互に影響を与え合い、互いに学びあう機会を得たと解釈できる。特に、リーダーシップの集団維持機能の、“場を和ませることができる”といった、「集団内の人間関係を円滑にしようとする力」や、「ユーモアや明るさ」といったリーダーシップや社会的スキルが向上したことは、野外でスカウト技能を競うゲーム（計測、火熾し、ロープ結び、料理コンテスト）や営火（キャンプファイヤー）などでの“楽しさ”を通じて得られたものであると考えられる。すなわち、スカウト教育において、活動は、スカウトにとって楽しいゲームという要素を基本としており、スカウト達は、スカウティングという楽しいゲームに熱中する間に、ひとりでに、「人格」「健康と体力」「知識と技能」「奉仕」の社会人に必要な4つの資質を高めていくとされる。“楽しさ”を通じた教育は、ボーイスカウト教育の特徴であるが、ともすれば、体験活動は、楽しさだけを狙ったプログラムや単なる体験や遊びのレベルに留まることにな

るが、本調査の結果は、ノンフォーマル教育としてのボーイスカウト教育の有用性と可能性を示すものである。

(4) 本研究の問題と今後の課題

最後に、本研究の問題と今後の課題について述べる。本研究は、地区のグリーンパー（班長、次長クラス）から成る混成隊による2泊3日の訓練キャンプとしての体験活動について、ノンフォーマル教育としてのボーイスカウトにおける体験活動が青少年に与える影響を明らかにすることができた。しかし、本調査においては、単発的な混成隊における訓練キャンプでの体験活動であり、また、調査対象者のほとんどが男子スカウトであった。よって本調査の結果を、より日常的なスカウト教育の効果に一般化することには注意が必要である。より日常的なスカウト教育の効果をみるためには、普段の隊における活動について、多様な地域、多様な年齢や性別のスカウトを対象とした、より長期的、継続的な調査の実施と、そこから得られた多様な側面に関する質的、および、量的データによる実証的研究が望まれる。

文献

- 中央教育審議会 (2013). 今後の青少年の体験活動の推進について (答申) <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1330231_01.pdf> (2015年6月18日)
- 独立行政法人国立青少年教育振興機構 (2010). 体験活動による「生きる力」の変容が見える！「生きる力の測定・分析ツール」 独立行政法人国立青少年教育振興機構.
- 福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2010). 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究 福岡県青少年アンビシャス運動特別レポート 福岡県青少年アンビシャス運動推進室.
- 国立妙高青少年自然の家 (2011). 少年期（高学年）のリーダーシップ想定尺度活用術

〈<http://myoko.niye.go.jp/result/H23/leadership.pdf>〉(2015年2月3日)

公益社団法人 ガールスカウト日本連盟 (2013). 「女子だけで活動をおこなう意味」 調査研究中間報告 〈http://www.girlscout.or.jp/activities/project/girls-edu/pdf/201303_interim_report.pdf〉 (2015年11月15日)

三隅二不二 (1978). リーダーシップ行動の科学 有斐閣.

中野充・島貫織江 (2012). 第22回世界スカウトジャンボリー (22WSJ) 調査報告書—国際的な集団野外生活が青少年に与える影響—, 国立青少年教育振興機構調査研究報告書.

中野充・齋藤雄 (2014). 第16回日本ジャンボリー (第30回アジア太平洋地域スカウトジャンボリー) における事業成果把握に向けた参加者に及ぼす効果—国際的な集団野外生活が青少年に与える影響— 青少年教育研究センター紀要, 3, 82-99.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent selfimage*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

謝辞

本調査の実施において、日本ボーイスカウト東京連盟新多磨地区の石橋朋広副コミッショナー (BS担当), 2014年度新多磨地区BS山中訓練キャンプの指導者の皆さんに多大なご協力を賜りました。また、研究の目的を理解し、調査に協力してくれたスカウトに深く感謝申し上げます。彌榮。